

No.12, Feb 2019

Research Center for Cooperative Civil Societies,  
Rikkyo University

## 全学共通科目「市民が動く、社会が変わる」開講

高木 恒一（共生社会研究センター 副センター長）



グループでディスカッション

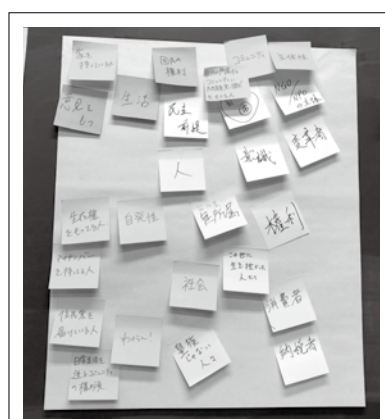
立教大学の全学共通科目にコラボレーション科目というカテゴリーがあり、授業の主担当者であるコーディネーターに加えて毎回2名の講師を招くことができます。2018年度の秋学期にこのカテゴリーを利用して、高木がコーディネーター、平野泉・センターアーキビストが全回参加する講師となり「市民が動く、社会が変わる」を開講しました。提案部局は高木が所属する社会学部という扱いですが、実質的な企画・運営は共生社会研究センターが行なっています。この授業の目的を「社会を動かす主体としての市民のあり方を多様な現場に関わる研究者、市民活動家の取り組みを紹介しつつ検討していく」（シラバス）こととして、表のような授業を展開しました。

センターがこれまでに開講した同様の科目の状況から大人数講義になると見込んでいたのですが、蓋を開けてみると5限に授業を設定したせいか受講者は29名でした。想定外の人数に当初は戸惑ったのですが、少人数の特性を活かして多彩な形式を展開することができました。多くの回では、登壇した講師から「お題」を出し、小グループに分かれて意見の共有や議論を行うワークショップ

が行われました。例えば「市民とは何か、社会とは何か」（高木担当）の回では、いくつかの「市民」の概念や定義に関わる文書を紹介したのち、「あなたの考える市民とは誰か」を問い、議論させました。また「公害の経験を地域再生に生かす」（ゲストスピーカー・林美帆さん）の回では、地域で発生した健康被害の状況を設定して、被害者、市役所職員、医師、加害企業と疑われる工場の経営者や従業員などの役割を演じさせることを通して、多様な立場の見方・考え方が交錯する現場のありかたを疑似体験させました。

このような主体的・積極的な授業参加を毎回のように求められて、受講生は面喰らっている様子もありましたが、思いのほか活発な意見交換が行なわれました。韓国、香港、中国などからの留学生や、特別聴講の高校生も含まれていたこともあり、受講生がお互いに違うものの見かた・考えかたがあることを実感したようです。また、リアクションペーパーには授業の内容をきちんと受け止めたコメントが書かれていました。例えば「差別とたたかう市民：アパルトヘイトの南アフリカ」（ゲストスピーカー・楠原彰さん）の回では「社会の問題は加害者と被害者という単純な問題ではなくて、自らが自らを害していることもあるし、思わぬところで当事者になっていることもある。そのような見えないところが見えるようになるということが大きなことである」というコメントがありました。

授業の運営には苦労もありますが、センターが蓄積している市民活動の経験を踏まえて受講生に「市民」や「社会」への考察を深めてもらいたいという思いが伝えられたという手応えを感じています。なお、この授業は2019年度も社会学部・共生社会研究センター共同提案の授業として開講する予定です。



「市民とは誰か？」を考えてみた

## 【講義内容】

1. イントロダクション	8. オルタナティブな市民の交易 ※
2. 市民とは何か、社会とは何か	9. オルタナティブな社会づくりのための NGO 活動 ※
3. 公害の経験を地域再生に活かす ※	10. 差別とたたかう市民：日本の反アパルトヘイト運動 ※
4. 持続可能な発展と市民の活動 ※	11. ポスト・アパルトヘイトの南アフリカ ※
5. 市民と地域 ※	12. 市民の記録を未来へ：立教大学共生社会研究センターの試み
6. 地域で考え、地域で動く ※	13. 3.11 以降の市民社会
7. 東南アジアを歩く：鶴見良行の歩き方 ※	14. 総括

※の回にはゲストスピーカーに登壇いただきました。



## 「練馬母親連絡会資料の調査と活用」を授業で試みて



山崎 雅子(立教大学兼任講師)

2018年度秋学期開講の文学部教育学科「教育調査実習4b」は、「運動資料の調査と活用」と銘打って、共生社会研究センター所蔵の練馬母親連絡会資料を利用して、それぞれが自分の関心に即したテーマを立て調査し報告するという内容で授業を進めています。受講生は教育学科の3年生19名。この原稿を書いている時点では、調査の途中報告が行われています。ここで受けた指摘や助言を参考にしてさらに調査を進めレポートを完成させ、1月下旬の最終授業でその成果を共有し合うことになっています。

私は練馬区在住で、地域の仲間とともに、練馬の女性たちの住民・市民運動を記録し歴史化するという活動をしています。練馬母親連絡会資料は、練馬という地域に生き地域の形成に関わってきた女性たちの姿に迫るうえで欠かせない資料で、私もたびたびセンターを訪ねては利用させていただいてきました。その意味で個人的に思い入れのある資料ですが、それ以上にこれほど多様な領域の内容を含み、しかもまとまった形で保存され公開されている運動関係資料も珍しく、もっと周知され利用されてよいと思っていました。

今回、調査を目的とした授業を担当するにあたって、この資料を利用する以外の選択肢は考えられませんでした。センターがある立教大学の授業だからこそ可能なことで、このチャンスを逃す手はありません。学生たちにとっても資料に触れることは、当時の社会状況や問題状況をうかがい知り、人生の先行者たちの努力の上に今があるという歴史の意味を実感する機会となることでしょう。子どもや教育に関する資料も多く、教育学科の学生にも取り付きやすいはず。さらにこの資料から女性たちの思いや行動、それにともなう変化や成長を感じ取り、

運動がもつ教育的な意味にも気づいてもらえるのではないかと思います。

とはいえ、一昔前の古くて雑多な資料群が、若い学生たちの興味をひくのか、不安がなかったわけではありません。実際のところ学生たちも、現物の資料を手にしてどう扱ったらよいのか戸惑っているようでした。調査のためセンターを訪問するタイミングもはかりかねていたようです。それでも調査報告の日程を決めたあたりから、発表順が早い学生からセンターに通い資料と向き合い始め、その発表に触発されて他の学生もセンターに足を運び資料を探すという、よい循環が生まれていきました。

練馬母親連絡会資料は、練馬母親連絡会の活動にともなって生じた記録類から成り立っています。それは翻って、会の活動の範囲内の内容物しか含んでおらず、ある事柄について調べようとしても、会がその事柄に関与していなければ、期待するだけの資料は出てこないことを意味します。そのためテーマ設定の見直しや方法上の工夫が必要になるケースも当然生じてきます。

しかしそうした状況に遭遇しても、学生たちは柔軟な発想と自由なアプローチをもって乗り越えようとしています。不登校問題を調べている学生は、限られた資料のなかに「登校拒否・不登校問題全国をつどい」の記録を見つけ、東京でをつどいを手伝った練馬のグループを探るという方向を出してきました。練馬母親連絡会の活動に農業の問題がほとんどないことに気づいた学生は、会が考えるまちづくりと、都市化による農地減少に対して農地保全を主張する市民たちが求めるまちづくりとに違いがあるのかというユニークな研究視座を提示しました。また会の活動にも女性たちの言動にもジェンダーの視点が見られないとして、敢えて婦人問題関係の資料を追い、ジェンダー問題への意識の有無を見極めようとしている学生もいます。会や女性たちがやらなかったこと、できなかったことも含めて資料に迫ろうというところが面白く、学生たちのしなやかでたくましい挑戦に目を見張るばかりです。

忙しいスケジュールのなか、みんなよく頑張っています。どんなレポートがで上がるのか、そのなかで練馬の女性たちの姿はどう受けとめられているのか、楽しみでなりません。

運動は教育活動そのものではありませんが、関わった人びとの社会的形成に少なからぬ影響を与えます。資料を通して垣間みた練馬母親連絡会と女性たちの運動が学生たちの心のどこかに何らかの痕跡を残したとしたら、この資料は時代を越えて運動と人びとをつないだといえるかもしれません。資料を残し、資料と出会う機会をつくってくれた方々に感謝します。



調査した内容について報告する学生

## 市民の記録を、学びに活かすには



平野 泉(立教大学共生社会研究センター アーキビスト)



センターは大学内にある機関なので、「さぞたくさんの大学生が訪れるのだろう」と思われる方もおいででしょう。しかし、子ども時代から親しんでいる図書や雑誌とは異なり、多くの学生にとって、センターで所蔵するような資料は未知の情報資源です。そのため、センターでは2012年度から、センター資料と関連のある授業を開講したり、運営委員の教員が授業に所蔵資料を取り入れたりなど、様々な努力をしてきました。しかし、数百名収容の大教室で市民活動とその資料の話をして、「じゃあその資料を見てみよう!」という学生がどんどんセンターにやってくる—というようなことが起こるわけではありません。

しかし、2015年に現在の場所に引っ越し、広いスペースと、教室に近い便利なロケーションを得て以来、教育プログラムとのコラボレーションの可能性が広がりました。まず、広くなっ

たことで、小規模のクラスであればセンターで授業をすることも可能となりました。例えば山崎雅子先生のクラスのように、センター資料を使った調査を授業の課題とした場合、みんなで「センターで資料を読んでみる」というワークを組み込むことで、センターの利用方法などに関する疑問をいっきに解消することができます。そのことで、学生が調査のために来館するときのハードルも少しは低くなるようです。また、教室が近くなったことで、石井正子先生のクラスのように人数が多い場合も、授業の目的に合致し、教室での利用に耐える資料を選んでクラスに「出前」できるようになりました。

2017年にポートランドで開催されたアメリカ・アーキビスト協会年次大会に参加したときのこと。彼の地のアーカイブズ機関は、一次資料を用いた教育(Teaching with Primary Sources)





センターが所蔵するNGOの資料を活用したのは、「国際協力・開発学概論」という授業でした。1～3年生を対象とした国際協力の導入科目で、2018年度は67人が履修登録をし、その8割が1年生です。

「NGO って聞いたことあるけど、何かわからない…」というデジタルネイティブ世代の学生たちに、1960年代ごろから活発になった日本の国際協力NGOの歩みを理解してもらうためには、実際に資料を手にとって見てもらう方がいい。このような思いつきから、センターのアーキビストの平野泉さんにお話し、昨年度と今年度、授業の1コマを担当していただきました。

授業は、グループになってディスカッションをして発表する参加型で行っているのですが、平野さんが、NGOの資料をグループワークで読むための、面白い仕掛けを考えてくれました。その仕掛けというのは、次の設定で資料を読むというワークです。

## 【設定】

「あなたは、NGOでボランティアをしたいと考えています。たまたまこの団体のことを知って興味を持ち、連絡してみたところ、今週金曜日に事務局長とお会いすることになりました。事前準備のため、共生研でこれらの資料を読んでいます。」

そして、この設定のうえに、

- (1) このNGOが活動を始めたのはいつか？
  - (2) 活動の目的は？
  - (3) 活動の内容(地域、テーマ、対象、具体的な事業など)は？
  - (4) 資料から読み取れる、このNGOで活動する人たちの「思い」は？
- を中心にワークシートに記入しながら資料を読み込んでいてもらいました。

さて、デジタルネイティブ世代の学生たちは、ウェブサイトがなかった時代に発行された資料を手にして、いったい何を思ったのでしょうか。

実際にNGOの資料に触れるのは初めてだったという学生からは、とにかく多岐にわたる分野や地域で活動をしているNGOの存在に驚いた、という感想が寄せられました。資料から伝わってくるNGOスタッフの熱い思いに引き込まれたり、NGOが時代とともに変わっていく様子に気が付いた、という学生もいました。

私にとって意外だったのは、アーカイブズが何か、ということについて、初めて学んだ、という学生が多かったことです。授業の冒頭で平野さんが「NGOの活動とアーカイブズ」という内容で分かりやすく、国際赤十字委員会や、オランダにある国際社会史研究所のような、NGOや社会運動のアーカイブズを保存・公開する専門機関があることを導入してくださいました。とくに赤十字国際委員会が、第二次世界大戦中に彼らが理念としてかかげる人道支援の中立性を担保できずに、ナチスに協力



授業風景：NGOの資料をグループワークで読み、発表する

したという批判を受けたが、当時の記録をきちんと保管したアーカイブズがあったため、様々な角度から検証が進められている、という話は、学生数名には強い印象を残したようでした。

学生たちがNGOの資料から読み取ったように、国際協力の在り方は時代ごとに変わります。だからこそ未来の国際協力を構想するためには、これまでのどのように日本の市民社会が海外と協力しようとしてきたのかを知ることが大切だと思っています。NGOの資料に触れることが、そうした過去を知るいい機会になると実感しました。

最後に、私自身が国際協力NGOにかかわってきた経験から、NGOのアーカイブズについて述べさせてください。

立教大学共生社会研究センターが蓄積しているNGOの資料は、ニュースレターなど、主にNGOが対外的に発表してきたものです。一方、日本に欠けているのは、NGOが海外の現場で実施してきたプロジェクトの活動記録の蓄積とその公開です。実際、NGOのプロジェクトの現場では、失敗は不可避ですが、失敗の経験は公開物には掲載されません。しかし私はむしろ、こうした失敗の記録にこそ、将来のプロジェクトを構想するための貴重な学びがあると思っています。

例えば、イギリスの大規模なNGOにオックスファムGB (Great Britain) があります。オックスファムGBは公開情報ポリシー (open information policy) によりプロジェクト実施記録をアーカイブズにし、基本的に公開しています。アーカイブズが外部に開かれることにより、同団体のプロジェクト実施記録が論文の材料となり、研究が進み、その学びがオックスファムに還元されるという経路が創られています。

失敗を批判するのではなく、学びの糧にするためには、そのような目的を掲げたアーカイブズの設置が、日本にも求められていると思います。

に力を入れていると聞き、ワークショップに参加してみると、確かに盛り上がっています。その背景には、2010年に公表された、公教育に関する各州共通基礎スタンダード (Common Core State Standards、以下「コモン・コア」) がありました。コモン・コアは、子どもたちが高校卒業後の教育や訓練に適應するための核となる知識やスキルを身につけられるよう開発されたもので、歴史・社会科学分野で求められるリテラシーの一部として、ある事象に対する複数の説明を評価し、一次資料・二次資料の分析結果と最も合致するものを見極める能力なども含まれています。ワークショップでは、地域資料を持つ公共図書館が、域内の小学校とコラボしている例も紹介されていました。センターのような大学内のアーカイブズ機関も、一次資料の何たるかをすでに知り、調査経験もあるコモン・コア世代の学生を迎えるにあたり、教育プログラムの幅を広げようとしていることがうかがわれました。そして何より、アーカイブズ資料を使った学びには、学び者の情報リテラシーを高め、批判的思考力を鍛える力がある、だから、学ぼうとする人のためにいろいろと工夫をし、新しい取り組みをしよう！という強い意欲が、ワークショップの参加者からは感じられたのです。

情報の洪水に誰もがおぼれかけている現在、様々な立場の様々な人が書いた様々な資料を的確に読みこなし、分析し、照合し、情報の信頼性を見極める能力の必要性は増えています。日本でも、2022年度新入生から実施される新指導要領に「諸資料等を基にした多面的・多角的な考察」などを通した「深い学び」という視点が盛り込まれました。新要領に基づく現場の実践がどのようなものになるのかは未知数ですが、高校教育などとの連携の可能性も視野に入れつつ今後の動きを見守る必要があります。

センターで仕事をしていると、現物の持つ力、そして自分の頭で考え、動く人々の経験と言葉だけが持つ力をつねに感じます。主観的で、地に足のついた、暮らしの中で生まれる言葉の力。市民の記録にあり、客観性を是とする論文や新聞記事などにはない力に気づくには、ある程度の時間が必要です。だからこそ、限られた時間で資料と向き合う学生が「ハッ」とするようなしかけや、読めば読むほど疑問が深まって次から次へと読んでみたくなるような提示のしかたを考え、工夫していきたいと思っています。

## センター利用案内

### 利用資格

とくにありません。立教大学共生社会研究センター所蔵資料の利用を希望される方は、どなたでもご利用いただけます。

### 開館時間

★ご利用には事前予約が必要です。

月～金曜日（祝日をのぞく）

10:00～12:00、13:00～16:00

ただし、立教大学の一斉休業日のほか、資料整理などのため臨時に閉館する場合があります。その場合は、あらかじめセンターホームページなどでお知らせいたします。

### 閲覧

初回に簡単な利用者登録をお願いいたします。

資料は原則として閉架式です。

資料の貸し出しは原則として行ないません。

### 閲覧制限等

資料は原則公開ですが、プライバシー侵害の有無や資料保存の観点などから閲覧を制限する場合があります。

詳しくは下記までお問い合わせください。

### 【お問い合わせ・ご予約は】

立教大学共生社会研究センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

電話：03-3985-4457 FAX：03-3985-4458

E-mail：kyousei@rikkyo.ac.jp

### 【2018年度秋学期 センター組織】

運営委員会 沼尻 晃伸（立教大学文学部教授）センター長

高木 恒一（立教大学社会学部教授）副センター長

市橋 秀夫（埼玉大学大学院人文社会科学部教授）副センター長

石井 正子（立教大学異文化コミュニケーション学部教授）運営委員

小野沢 あかね（立教大学文学部教授）運営委員

町村 敬志（一橋大学大学院社会学部教授）運営委員

リサーチ・アシスタント

山崎 果歩（立教大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程2年）

阿部 晃平（立教大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程2年）

今井 麻美梨（立教大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程1年）

李 英美（一橋大学大学院社会学部教授）後期課程）

スタッフ 平野 泉・荒井ひとみ（～11月）・川路さつき（11月～）

### 編集後記

12月から1月にかけては、卒論やレポート執筆のためにセンターを訪れる学生が増えます。山崎先生のご報告にもあり、自分で選んだテーマに合った資料が、つねにセンターで見つかるとは限りません。それだけに、それまで静かに資料を読んでいた学生から、「……これだ!」というものが見つかった喜びがひしひしと伝わってくるがあると、スタッフもうれしくてしかたがありません。そんなとき、「あったあった、これだ!」と叫んでくれたりすると、おっぴらに一緒に喜べるので、うれしさもひとしおです。（ひ）



ある日の請求資料  
——いいレポートが書けそうです——

## 【公開ワークショップのお知らせ】

### 立教大学共生社会研究センター公開ワークショップ ビラを歌おう! —運動の記録／言葉のポテンシャル

日時：2019年2月28日（木）13:30～17:00（13:00開場）

会場：立教大学池袋キャンパス 共生社会研究センター閲覧室

\*事前申込制（メール・電話・Faxにて受付）、定員12名

講師：佐藤壮広さん（明治大学・立教大学等非常勤講師）

センター所蔵資料の中でも、様々な運動が様々な局面で発行したビラ類は、簡潔なフォーマットの中に運動外部の人々への呼びかけや訴えが盛り込まれ、読む者に強い印象を残します。

そうした運動の記録／言葉の持つポテンシャルを探るべく、教育やまちづくりなど様々な現場で、人々の思いを歌にする実践を重ねている宗教人類学者の佐藤壮広氏を講師・ファシリテーターとしてお招きし、公開ワークショップを企画しました。

運動のビラを読み解き、心に湧き起る感情を詩にして歌うという活動を通して、記録された言葉と感情に迫るための新たな実践を生み出すことを目指します。

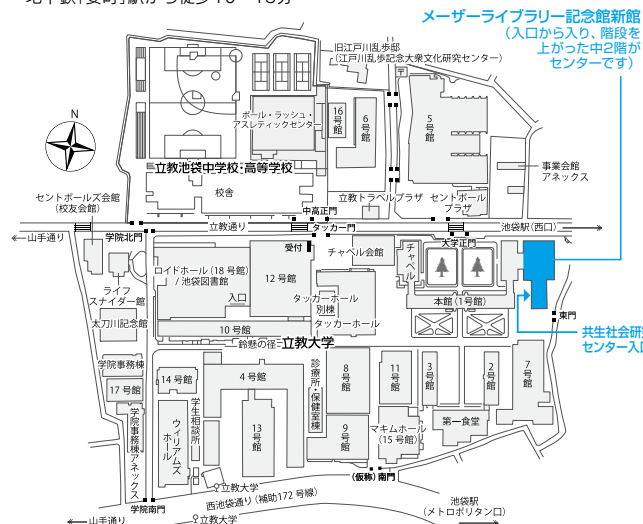


ミニ・ワークショップ「ビラで歌おう!」  
（2018年11月28日）の様子

### 【センターへのアクセス】

JR・私鉄・地下鉄各線「池袋」駅・

地下鉄「要町」駅から徒歩10～15分



**PRISM** — A Newsletter of Research Center  
for Cooperative Civil Societies — No.12, Feb 2019

3-34-1 Nishi-Ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo, Japan 171-8501

Tel: +81-3-3985-4457 Fax: +81-3-3985-4458

E-mail: kyousei@rikkyo.ac.jp

http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RCCCS/



**立教大学**  
RIKKYO UNIVERSITY